

扁鵲の〈治療世界〉：虢太子蘇生説話

角屋 明彦

Bianque, His System of Healing : The Guo-Taizi Revival Episode

KADOYA, Akihiko

Abstract

The most famous doctor in Chunqiu-Zhanguo Era (春秋時代) may well have been Bianque (扁鵲). This paper discusses his healing system. Among his various episodes, I selected Guo-Taizi Revival Episode (虢太子蘇生説話) and I used *Shiji* (『史記』). Without too strict judgment and too much scrutiny of words, I respected the image of Bianque, therefore I tried to interpret the story literarily; because I think that the image in people's mind has the direct relationship to healing. From this standpoint, three scenes are important. Firstly, the scene of the dialogue between Zhongshuzi (中庶子) and Bianque shows us "the vector of cure". Secondly, the scene of the dialogue between Guo-Jun (虢君) and Bianque shows "the multiple strata of disease". Thirdly, the scene of the practical treatment Guo-Taizi (虢太子) received shows both the team practice and non-magical medicine. These episodes give us, who are living in modern scientific era, great and fresh instructions. We can say that episodes have the meaning of the power of healing.

要旨

春秋・戦国時代の中国の代表的名医は扁鵲であろう。その扁鵲の構築した〈治療世界〉を考察する。扁鵲に関わる多くの説話のなかで「虢太子蘇生説話」を取り上げ、『史記』扁鵲倉公列伝を用いる。しかしその真偽・詳細の吟味に重点を置くのではなく、後世の人々のイメージに残る扁鵲像を文学的に読み取ることが企図する。歴史資料の信憑性如何によらず、人々の心に映像化された扁鵲こそが、〈病〉とその〈癒〉に直接的に関与すると考えるからである。話のなかの3つの場面に注目するが、「中庶子との対話」のシーンでは「〈癒〉のベクトル」、「虢君との対話」のシーンでは「〈病〉の重層構造的性」、「太子への治療」のシーンでは「師弟一体の治療活動」と「非魔法の科学的医療」が浮かび上がる。これらのいずれも現代に生きる我々に斬新で強

烈なインパクトがある。扁鵲の説話それ自体に〈癒〉の力があると言えるであろう。

キーワード

扁鵲 (Bianque)

〈治療世界〉 (healing system)

『史記』 (Shiji)

虢太子蘇生説話 (Guo-Taizi Revival Episode)

〈癒〉 (healing)

はじめに

春秋・戦国時代の中国の代表的名医といえば、扁鵲の名が筆頭に挙がるであろう。しかし、扁鵲の登場する古典は、『列子』『韓非子』『韓詩外伝』『戦国策』『淮南子』『説苑』『史記』『春秋左氏伝』など多数あり、その年代幅も、古くは前七世紀、新しくは前三世紀とおよそ四〇〇年の長きに亘っている。そのため、扁鵲と呼称される医師が複数存在したであろうことが通説となっている。少なくとも扁鵲なる医師が一人存在し、名医の噂が空間的・時間的隔たりを超えて伝播するに従って、第二の扁鵲、第三の扁鵲…と複写されて呼称されてゆけば、複数の扁鵲が存在することになる。それらを扁鵲A、扁鵲B、扁鵲C…として個別に調査・分析することにも意義があるが、それらが扁鵲の名で共通して呼ばれ、人々、とりわけ中国医学の臨床現場ではひとつの人格として扱われていることから、本論文は、「グループ扁鵲」=扁鵲と看做し、その〈治療世界〉を考察することにする。

さて、扁鵲に関わる説話は多種伝えられているが、以下ではそのなかのひとつ「虢太子蘇生説話」を取り上げる。そしてその真偽・詳細の吟味に重点を置くのではなく、後世の人々のイメージに残る扁鵲像を文学的に読み取ることを企図する。歴史資料の信憑性如何によらず、人々の心に映像化された扁鵲こそが、〈病〉とその〈癒〉に直接的に関与すると考えるからである。

甲章 扁鵲の虢太子蘇生説話

名医扁鵲が諸国を巡って治療活動をするなかにあつて、虢という国を訪れ、その太子が死亡してまもないと知り、これに施療して蘇生せしめた、というのが話の大筋である。これを記載した多くの古典のなかで今日に至るまで最も人々の目に触れてきたもののひとつとして、前漢・司馬遷の手になる『史記』がある。まずはそのくだりを書き下しの形で記す。

『史記』扁鵲倉公列伝⁽¹⁾

扁鵲虢に過ぎる。虢の太子死す。扁鵲虢の宮門の下に至り、中庶子の方を喜む者に問ひて曰く、太子何の病ぞ。國中の治禳衆事に過ぐと。中庶子曰く、太子の病は血氣時ならず、交錯して泄るを得ず。外に暴發し、則ち中害を爲す。精神邪氣を止むる能はず。邪氣畜積して泄るを得ず。是を以て陽緩にして陰急なり。故に暴に斃して死すと。扁鵲曰く、其の死は何如な

る時ぞと。曰く、鶏鳴より今に至ると。収むるか。曰く、未だし。其の死未だ半日なる能はざるなりと。言ふ。臣は齊の渤海の秦越人なり。家は鄭に在り。未だ嘗て精光を望み前に侍謁するを得ざるなり。太子不幸にして死すと聞く。臣能く之を生かさんと。中庶子曰く、先生之を誕する無きを得んや。何を以て太子生くべしと言ふや。臣聞く、上古の時、醫に俞跗有り。病を治するに湯液・醴灑・鑿石・橋引・案扞・毒熨を以てせず。一撥して病の應を見、五藏の輪により、乃ち皮を割き肌を解き、脈を訣し筋を結び、髓腦を搦し荒幕を搦へ、腸胃を瀦洗し五藏を漱滌し、精を練り形を易ふ。先生の方なく是くの若くなれば、則ち太子生くべきなり。是くの若くなる能はずして之を生かさんと欲するは、曾ち以て咳嬰の兒にも告ぐべからずと。終日にして扁鵲天を仰ぎ歎じて曰く、夫子の方を爲すや、管を以て天を窺ひ、郟を以て文を視るがごとし。越人の方を爲すや、脈を切し聲を聴き形を寫すを待たず、病の在る所を言ふ。病の陽を聞き、論じて其の陰を得、病の陰を聞き、論じて其の陽を得。病の應は大表に見はる。千里を出でずして決すること至りて衆きも、曲止すべからざるなり。子吾が言を以て誠ならずと爲さば、試みに入りて太子を診せよ。當に其の耳鳴りて鼻張るを聞くべし。其の兩股を循でて以て陰に至らば當に尚ほ温かなるべきなりと。中庶子 扁鵲の言を聞き、目眩然として瞶ず、舌橋然として下らず。乃ち扁鵲の言を以て入りて鏡君に報ず。鏡君之を聞きて大いに驚き、出でて扁鵲を中闕において見て、曰く、竊かに高義を聞くの日久し。然るに未だ嘗て前に拜謁するを得ざるなり。先生小国に過ぎる。幸ひにして之を擧す。偏國の寡臣の幸ひ甚だし。先生有れば則ち活き、先生無くんば則ち棄捐せられて溝壑を填め、長終にして反るを得ざらんと。言未だ卒らず、因りて嘘唏服臆し、魂精泄横し、流涕長潜して忽忽として眇に承く。悲しみ自ら止むる能はず、容貌變更す。扁鵲曰く、太子の病の若きは所謂尸蹙なるものなり。夫れ、陽の陰中に入るを以て胃を動し、中經・維絡を纏縁し、別れて三焦膀胱に下る。是を以て陽脈下遂し、陰脈上争し、會氣閉ぢて通ぜず。陰上って陽内行し、下・内鼓して起こらず。上・外絶して使を爲さず。上に陽を絶つの絡有り、下に陰を破るの經有り、陰を破り陽を絶ち、色已に廢し、脈亂る。故に形靜にして死狀のごときも、太子未だ死せざるなり。夫れ、陽の陰に入るを以て藏を支蘭する者は生き、陰の陽に入るを以て藏を支蘭する者は死す。凡そ此の數事は皆五藏中に蹙するの時に暴作するなり。良工は之を取る。拙き者は疑殆すと。扁鵲乃ち弟子・子陽をして鍼を砥石に厲せしめ、以て外の三陽五會を取る。聞く有りて太子蘇す。乃ち子豹をして五分の熨を爲り、八減の齊を以て和して之を煮、以て更々兩の脇下を熨せしむ。太子起坐し、更に陰陽に適す。但だ湯を服する二句にして故に復す。故に天下盡く扁鵲を以て能く死人を生かすと爲す。扁鵲曰く、越人は能く死人を生かすに非ざるなり。此れ自ら當に生くべき者なり。越人能く之をして起たしむるのみと。

乙章 三つのシーン

扁鵲のこの説話は古来、知らない人としてないほど有名であり、さまざまな角度から光が照射され議論されてきた。しかし、現代に生きる我々に投げかけるこの説話の意味をここで今ひとたび私なりに考えてみようと思う。説話の中の三つのシーンに注目する。

第一節 中庶子との対話

扁鵲は、一箇所に定着して治療活動する定住医ではなく、あちこちを旅しながら治療をする遍歴医であった⁽²⁾。それは当時、扁鵲以外の多数の治療師にも通ずる一般的な活動形態であったであろう。いづこにいかなる治療技法や医療思想が存在しているのか、全体分布構図がつかめない時代にあって、人々の評判や知人の紹介をつてに自分の脚で旅をして現地に行き、実際に触れてみるより方法がなかったのである。治療師になろうと志を立ててのちは、各地に埋没している〈治療世界〉に暗中模索しながら接触を試みる旅が始まる。それはいつ完成するともわからない。未完成のまま生涯を終えるかもしれない。それを承知でなおも医師たちは旅を続けたのであろう。

扁鵲は虢という国を訪れた⁽³⁾。町をあげて「治穰」(平癒の祈願)をしている。そこで御殿まで行き、門士に事情を尋ねた。医師の来訪に門士はなかに報告に入った。報告を受けた上司のなかに医療に詳しい者がいた。官名は中庶子と言う⁽⁴⁾。中国の知識人は思想・文学・技術などそのジャンルに拘わらず知的刺激を求めて読書する。従ってさまざまな領域に通じている。彼らの頭脳裏はむしろジャンルの区別がない「知識の煎薬鍋」といったほうがよい。だから医療に関する知識を身に具えているのはごく自然なことであった。ここで登場する中庶子は姓名が記されていないが、相当の知識人であったろうことは想像に難くない。遍歴の医師が訪ねて来たとの報告を受け、自分の医学知識と比較してみたいと思ったかもしれない。ここにこの中庶子と扁鵲、二つの異質の〈治療世界〉が接触することになる。

太子はいかなる病であったかを問う扁鵲に対して、中庶子は一気に説明する。「太子さまの病は血気の運行が不規則となり、交錯して発散できず、外部に暴発し、それで体内に損傷を与えたのです。清純な気は邪気を抑えきれず、邪気は蓄積して排出不能。そのため陽気の機能が緩慢に、陰気の機能が急激になり、突然上昇して死に至ったのです。」中庶子は学んだ医学知識によって彼なりに理路整然とした機序説明をしている。主君の継嗣が亡くなったという衝撃的な出来事を彼は彼としてまず自分に、そして扁鵲にも納得させようとしている。

亡くなってまだ半日も経っておらず、納棺もまだであることを知った扁鵲は大胆にも言う。「私はなおせます。」これは中庶子への医学的挑戦でもある。しかし、扁鵲は虢に至るまでの遍歴の過程で類似の症例を知りもし、その治療方法も用意ができていたのであろう。それにしても、万一なおせなかった場合の責は死をもって償うことになる。これは扁鵲が治療師生命を賭けた捨て身の行為である。

当然の成り行きとして中庶子は反論を開始する。その言葉は扁鵲に対する嫌悪を含んでいる。「先生は私を誑か^{たぶら}そうとしておられるのでしょうか。何を根拠に太子さまが生き返るとおっしゃるのですか。上古の名医・俞跗^{ゆふ}ならばできかもしれませんが⁽⁵⁾、そうでもない限り無理だということは幼い子供にでもわかりますよ。」けれども、扁鵲は言う。「あなたの医術は、細い管^{くだ}で天を見たり、狭い隙間から中の文様を見たりするようなもの。私の医術は、脈を診たり、体表の色を見たり、体音を聴いたり、体を調べたりするまでもなく、病根のありかがわかるのです。外部の様子から内部の様子が推察できますし、内部の様子から外部の様子が説明できます。病の兆候は体

表に現れるものです。しかし、大きな苦勞をしなくても病状を見極めることはたやすいことですが、言葉で詳細に言い表すことはできないのです。」ここは古来いろいろな解釈がなされているくんだりであるが⁽⁶⁾、私としては、扁鵲が自分が病を全体的に捉えることから出発していることを主張していると取りたい。彼の治療は「全体から部分へ」との方向性を持ち、これが中庶子（をはじめとする圧倒的多数）の「部分から全体へ」という方向性と正反対である。細部の分析を積み重ね、理論・理屈によってそれらを組み立ててゆけば、やがては〈病〉の全体が見渡せる頂点に到達できると考えるのは学問的に誰でもが辿る思考過程である。しかし、扁鵲は自説を述べる。それでは〈癒〉にならない。医療は前者でなくてはならない。患者を救おうという強烈な意思があって、患者の抱える〈病〉の全体をまず見据える。そののち、治療上の必要に応じて各部各所の分析を行ないつつ、同時に治療を進行してゆく。「全体から部分へ」、この方向性に従ってはおぼえて太子蘇生が実現しうる、それは言葉を換えれば「〈癒〉のベクトル」とでも言うべきものである。畢竟、扁鵲の視線は虢の国の医学思想の〈病〉までも見据えているのではないだろうか。

扁鵲はなおも言う。「あなたが私の言うことを誠ではないと思われるのでしたら、ためしに太子を診察しなおしてみてください。太子の耳たぶに気血が流れる音、鼻孔が気血で張る音を聴いてください。両股を陰部までなでてゆき、まだ微かに温かなのを感じてください。」言葉にしては言わないが、「あなたがたはそういう診察をしましたか」と言ったも同然である。扁鵲は虢の国の診断方法がまちがっていると鋭く突いたのである。これには中庶子も相当の衝撃を感じたことだろう。太子の病気の実態のみならず、自国の医学の根本的誤謬を知ったのである。しかしながら、中庶子は扁鵲との論戦の勝敗を最重要と考えなかった。初対面とは言え、ここまで旅して辿り着いた扁鵲が、大事な太子が甦る可能性を秘めて眼の前にいる。自分のプライドを捨てたこの知識人は御殿に入り、虢の殿様に事態を報告して指示を仰ぐ。司馬遷がその報告のシーンを描写してくれたなら、後世の我々はずっと鮮明にこのくだりの持つ意味が理解できたであろう。しかし、中庶子と虢君の対話の一切は想像の彼方にある。それを読者の自由に委ねるところに司馬遷のねらい、もしくは外連味^{けれんみ}があるとも思える。

第二節 虢君との対話

虢君は中庶子より報告を受けるや直ちに中門まで自から足を運んだ。一国の当主が一介の医師を門まで出迎えに出る。一般にはありえないことである。それほどまでにこの君主は扁鵲に期待したのである。そして言う。「先生のご高名は久しい以前からうかがっておりますが、未だお目にかかれずにおりました。幸いにも先生がこの小国においでになり、息子のことを気にかけてくださったこと、田舎の小徳者の私にとりましてこれ以上の幸せはございません。」考えられる限りの謙譲である。「先生がいらっしゃればこそ息子も生き返りましょう。先生がいらっしゃらなければ、死体は溝に捨てられ、バラバラになり、永遠にこの世に生まれ直すことができませんでしょう。」そう言うや、涙はこみ上げむせび泣くのであった。これは君主の姿ではない。子を亡くさんとする父親の哀れな姿、それ以外の何物でもない。

面相の変わるほど泣き崩れる虢君に、扁鵲は直面する〈病〉の全体像がはっきり見えたにちが

いない。扁鵲の眼には三層の患者が見えるのである。一つはもちろん太子。二つは錯乱する虢君、三つは虢国医学。この「〈病〉の重層構造的性」を明確に把握した扁鵲は、まずは眼前に取り乱す虢君に〈癒〉の手を差し伸べる。扁鵲は真っ先に断言する。「太子さまのご病気は所謂、尸厥しけつというものです。」⁽⁷⁾ ここに至るまで、虢君をはじめとする人々には太子の病名が明かされていなかったであろう。身体に異状が発生し、あれよあれよと言ううちに悪化して、やがて息をしなくなる。息子を救うすべもなくうろたえるばかりの自分に歯がゆかったであろう。病気が息子の命を蝕むさまを見ていること自体が苦痛であったろう。しかもその病気の正体がわからない。名前のわからない敵と格闘するようなものである。それが二重の苦しみとなっていた。扁鵲はまず病名を告げる。そのことによって、父親の苦しみの外郭は消え去った。一瞬にして心が軽くなったであろう。無論、病名がわかれば回復が約束されるわけではないが、敵の姿がはっきり映像を結んだのである。どれほどの安堵を得たことであろう。扁鵲のこの最初の一言は医師としてのほとんど直観的行為であったかもしれないが、この一事をとってみても扁鵲が名医と言われるのがわかる。

続いて、扁鵲は尸厥の機序を説明する。「そもそも陽気が陰気に入って胃を乱し、経脈・絡脈に連鎖し、それが分かれ伝わって三焦⁽⁸⁾・膀胱にまで下ります。それで陽脈が下に落ち込み、陰脈が先を争って上に上り、陰陽二気の集まるところが塞がって流通しなくなるのです。そうすると、陰気が逆上して陽気が内行し、体の下部や内部では鼓動するのみで作動せず、上部や外部と隔絶して機能が果たせなくなります。上には陽気を隔絶する絡脈があり、下には陰気を破壊する経脈があり⁽⁹⁾、陰気を破り、陽気を絶っていますので、顔色も失われ脈が乱れているのです。ですから、見かけは静かで死んでいるように見えますが、太子さまはまだ亡くならはしません。」説明の最後はきっぱりとした断言であった。扁鵲の言いたいことは太子が死んではいないというただその一つであった。

この説明中に使われる〈気〉〈陰陽〉〈正邪〉〈内外〉〈上下〉などの概念は中庶子による説明とほぼ同じと看做してよいだろう。ではどこが違うのか。それはこうした概念群を組み立てる方向が異なるのである。扁鵲は太子の病名を告げてまず安心を与えたうえで、その機序を大まかなところから、細かなところへと説明している。聴き手の虢君が吸収できる範囲で納得しやすいように説得している。他方、中庶子は概念群を配置して理論的説明を打ち立てようとしていた。仮にこの中庶子のやりかたで扁鵲が虢君に説明をしはじめたならば、閉塞した心に、その理解はさらなる負担となつてのしかかるであろう。「太子さまは亡くならはしません。」扁鵲はただそれのみを虢君の心に伝えたい。スイッチをいれて明かりを灯すだけで事は済むのである。まずは明るくするだけで事は足りる。「そもそも陽気が陰気に入り、臓器をさえぎりどめた⁽¹⁰⁾場合は死にません。陰気が陽気に入って臓器をさえぎりどめた場合は助かりません。」これは現代風に言い換えれば、「上水道の水が下水に混じっても問題はありますが、下水が上水に混じったら大変です」ということになろうか。これなら心の塞いでいる人にも理解できる。「およそ、こうした一連のことはすべて五臓の中で陰陽二気が逆流した時に急に起きる発作です。すぐれた医師はそのように考えます。下手な医師は疑います。」中庶子を代表とする虢国の医学を批判している。医学そのものがまちがっているから今回のようなことが起きるのである、と。

虢君は見事に立ち直った。扁鵲は治療の最初に虢君の心理ケアを行なったのである。そしてそ

これは成功した。けれども魏君のさきほどまでの狼狽が消えたとすら司馬遷は書いてない。直ちに太子の治療が開始されるさまが活写されてゆく。そうした書きぶり自体が魏君の治療に成功したことの証しである。もしかしたら、この父親は君主であることも忘れ、太子の治療を援護したかもしれない。「おまえは湯をわかせ。」「おまえは薪を持って来い。」「おまえは扁鵲先生の汗をお拭きしろ。」…。司馬遷の筆は読者に想像の楽しみを与えてくれる。

第三節 太子への治療

いよいよ扁鵲が太子の治療を開始する。今に伝わる数ある扁鵲の説話のなかで、ほとんど唯一と言える具体的な治療行為記録である。他の説話は、扁鵲が会話を交わすもの、診察のみであるもの、もしくは扁鵲が関わる比喩などである⁽¹¹⁾。

さて扁鵲はまず子陽に鍼を砥石で研がせ、その鍼で三陽五会の経穴⁽¹²⁾を刺す。子陽とは扁鵲の弟子の名である。扁鵲は弟子を伴う遍歴医であった。その旅程のいずこで門弟となることを許したのか、どういう経緯であったのかは知る手掛かりが残されていないが、日を追うに従って名声を博していく扁鵲に、患者ばかりではなく、医学を志す人々が尊崇のまなざしを向けないはずがない。扁鵲の弟子になりたい者は数知れずいたことであろう。入門を懇願しても許可されない者がたくさんいたであろう。弟子になれるのは相当な倍率であったことであろう。そのあたりも読者の想像の楽しみの範疇にとの司馬遷の考えがあったのかもしれない。何らの記述もない。『史記』では直後にその名が出る子豹と合わせて二人である⁽¹³⁾。子陽と子豹は、どちらが上位であるか、俄かには断定しかねるが、扁鵲の弟子を志願する者たちの順位の第一位・第二位であったであろうことは間違いがない。扁鵲の弟子の座を確保・維持する者であるからには、自らを扁鵲の意思の延長線上に置き、師の指示が発せられるよりはるか以前に行動を起こさなければならない。そうしてこそはじめて師から信頼を得てやがては秘伝を継承できる。司馬遷は「使」の字を用いた使役形によって、扁鵲が彼ら弟子たちに次々と指示を与え、動かしているように描写してはいるが、実際には弟子たちが率先してきびきびと補助をしていたことであろう。ここにみられるのは師弟一体の治療活動である。

しばらくすると太子が息を吹き返した。そこでもう一人の弟子・子豹が「五分の熨」を作り、「八減の齊」と合わせて煮て、太子の脇の下に押し当てて、冷めるとまた取り替え取り替えして暖める。薬剤の成分など詳細は一切不明ではあるが、扁鵲と弟子たちがぴったり息の合った治療活動をする様子がありありと伝わってくる。太子は病床に起き上がって坐れるようになった。そののち扁鵲たちは太子の陰陽の二気を整え、二十日間に亘り煎薬を飲ませて、太子は本復に至る。ここでも陰陽の調整方法や煎薬の処方構成など具体的なことはわからない。わからないが、扁鵲の医療技術が魏国のそれを凌駕していることが明瞭に描かれている。周囲の人々の驚きは絶大であり、それは扁鵲が死人をも蘇生できる神異の医師であるという誇大な絶賛に直結する。けれども扁鵲は言う。「私は死人を甦らせることができるわけではありません。太子さまはもともと生きていらっしやう。私はただ太子さまが立ち上がれるようにしてさしあげただけです。」自分の医療は呪術・魔法ではない。整合性のある理論にもとづいている。だから今回の回復は何ら不思議なことではない。扁鵲はそう言いたいのであろう。扁鵲の〈治療世界〉はあの時代なり

の立派な「科学」であった。マジックではなくサイエンスである。そのような扁鵲自身による冷静な主張でこの蘇生説話は締めくくられる。

おわりに

春秋・戦国時代の中国医学史を語るときに忘れてはならない存在、扁鵲の構築した〈治療世界〉に関して、その数ある説話のなかでも「號太子蘇生説話」に焦点を絞り、その中の三つのシーンを考察してみた。中庶子との対話に見られる「〈癒〉のベクトル」、號君との対話に見られる「〈病〉の重層構造的性」、太子への治療に見られる「師弟一体の治療活動」と「非魔法の科学的医療」。これらのいずれをとっても現代に生きる我々に斬新で強烈なインパクトがある。扁鵲の説話それ自体が我々を癒す力を持っていると言えるであろう。

本論文はこれまでの諸賢の研究蓄積のうえに立ちつつも、言葉の細かい詮議はひとまず置いて、「號太子蘇生説話」を通して扁鵲の構築しつつあった〈治療世界〉を垣間見ようとしたものである。そのため文学的な視点から史料を読もうとした。それは、後世の治療師をはじめとする人々の心のなかに生きて存在するのは、史実としての扁鵲ではなく、文学としての扁鵲であるから、すなわち扁鵲の説話そのものに〈癒〉の力があると考えたからであった。

注

- (1) 『史記評林』巻105による。これは明・万曆四（1572）年に刊行されたものであり、それまでの『史記』研究の集大成と言える。和刻本はすべてこれに拠っており、研究者および漢方臨床家はこれによって扁鵲のイメージを感得したのである。詳しくは、宮川浩也、『『史記』扁鵲倉公列伝研究史（上）』、『漢方の臨床』、47—10、2000年10月、及び、同、『『史記』扁鵲倉公列伝研究史（下）』、『漢方の臨床』、47—11、2000年11月を参照。
- (2) 「遍歴医」「定住医」という観点から扁鵲を論じたものとしては、山田慶児、「扁鵲伝説」、（同、『夜鳴く鳥：医学・呪術・伝説』、岩波書店、1990年5月所収）、特に「6、遍歴の掟と象徴」を参照されたい。また、これに先立ち、加納喜光、「葉王」（同、『中国医学の誕生』、東京大学出版会、1987年5月所収）は扁鵲以前には史料に遍歴医が存在しないことを指摘し、その遍歴の地理的範囲・歴史的意義を考察している。
- (3) 號の位置はいまだに特定化されていない。周の武王の王弟・號叔が建てた東號（河南省滎沢県）は春秋時代に入る以前に滅亡している。また、王弟・號仲の西號（陝西省宝鶏県）は周の東遷（前770年）の際に上陽に移動して南號となり、晋の獻公により前655年に滅ぼされている。西號から分れた北號があったが、これも南號より前にやはり晋によって滅ぼされた。西號の旧地に留まり小號を名乗った一派は前684年に秦により滅亡した。
- (4) 周代には「庶子」「諸子」を置き、諸侯・卿・大夫の一族の戸籍を管理したとされる。「中庶子」の名称は戦国時代から使われ、秦・漢を経て呉に至って東宮職となった。
- (5) 『史記』扁鵲伝に記される兪跗の治療方法は超人的である。意味不明の言葉が並んでいるが、要するに魔法のような方法でなければ無理だと、中庶子は言いたいのであろう。扁鵲と兪跗の関わりについては、前掲の、山田慶児、「扁鵲伝説」、殊に「3、影としての兪跗」が詳しい。
- (6) 唐・司馬貞『史記索隱』の注（「止は語助なり。委曲具言すべからず」）によるとこのような意味となるが、同じ唐・張守節『史記正義』の注（「病を言ふは應見に有り。曲げて病の止住所在を言ふべからず」）によれば、「病は体表に現れた兆候にもとづいて議論できるのであり、理論理屈で事実を曲げて病の所在を述べることをしてはならない」となる。
- (7) 「厥」をめぐるのは、遠藤次郎、「『厥』の原義とその病理観：扁鵲による號の太子の治療の意義、

- 『日本医史学雑誌』、58—1、2012年3月が詳しい。
- (8) 「三焦」の語がはじめて用いられるのは、『史記』扁鵲伝、つまりこの箇所である。そのため医学史上きわめて注目されている。「三焦」に関する論考で代表的なものは、金関丈夫、「三焦」、(同、『日本民族の起源』、法政大学出版局、1976年12月 所収)、及び、山田慶児、「三焦」(同、『中国医学の起源』、岩波書店、1999年7月 所収)が挙げられる。
- (9) このくだりも古来さまざまな解釈がなされ、一定していない。最も大きな問題箇所は、『史記評林』に「下に陰を破るの紐有り」とある箇所である。『史記正義』の注には「素問に云ふ、紐とは赤脈なり」と記されているが、現行の『素問』には「赤脈」の記載がない。この部分の前にある「上に陽を絶つ絡有り」との対句関係から「紐」は「経」の誤りと考えるのが妥当であろう。誤字・脱字・衍字に加えての錯簡、それらは古典にはつきものであるが、細かい校勘はここではこれ以上触れず、全体として何を意味しているかを優先して読み継ぐことにする。
- (10) 『史記評林』には「支蘭」という語が使われている。「支」は「ふせぐ」、「蘭」は「闌」に通じ、「さえぎる」とする。箭内互『国訳史記列伝』下、国民文庫刊行会、1922年、42ページを参照されたい。尚、山田慶児は「夫れ陽の支蘭蔵に入る者は生き、陰の支蘭蔵に入る者は死す」と読み、「支蘭蔵」の意味は不明としている。山田慶児、「扁鵲伝説」、188ページ。
- (11) 『列子』湯問第五には、扁鵲が二人の患者に薬酒を与え、仮死状態になっている間に、両名の胸を切開し、心臓を取り替える様子が描写されているが、扁鵲が外科領域にも優れていたことを付加潤色しようとした創作の色彩が濃い。
- (12) 「三陽五会」にも諸説ある。その主なものは、①「三陽五会」を「百会」とみる説。『鍼灸甲乙経』に「百会、一名三陽五会なり」とあることにもとづく。②「三陽」を「三陽脈」(太陽・少陽・陽明)、「五会」を「百会・胸会・聴会・気会・膻会」とする説。③「三陽五会」を「三陽五輪」とみて、「三陽脈」と「五輪穴」とする説。『韓詩外伝』卷10と『説苑』弁物篇にあるこの號太子蘇生説話が「輪」と表記されていることを根拠とする。この問題の議論については、遠藤次郎、「扁鵲の経絡説：「三陽五会」の検討」、『日本医史学雑誌』、34—1、1988年1月、及び、山田慶児、「鍼灸の起源」、(同、『中国医学の起源』)、39ページ。
- (13) この部分に関する扁鵲の弟子の描写は出典によって異同がある。『韓詩外伝』卷10には、「子同は葉つき、子明は陽に灸し、子游は按摩し、子儀は神を反し、子越は形を扶く」とある。また『説苑』卷18には「子容は葉を擣き、子明は耳を吹き、陽儀は神を反し、子越は形を扶け、子游は矯摩す」となり、人名、人数、作業内容など異なっている。

